

(要約)

中国の朝鮮戦争—その参戦・戦闘と停戦交渉に関する研究

安田 淳

本研究は、国家を樹立した中国共産党が、戦争というものをどのように捉え、どのように戦争を実行し、その結果どのようにこれを終結させたのか、朝鮮戦争を題材に検討するものである。そしてそのことにより、中共は朝鮮戦争に際して安全保障をどのように認識し、それが朝鮮戦争への関与にどのように影響し、そこから中共は何を得たのかを考察するものである。

本研究は、「序章」と、本文である「第一章」から「第一〇章」、そして結論である「終章」の計 12 章から構成される。「序章」では、現代中国において 20 世紀終盤から今世紀初頭にかけて活発となった朝鮮戦争研究を概観し、その特徴や問題点、有用な成果を明らかにする。その上で、「朝鮮戦争における中共の考えや振る舞いはそれまでの中国近現代史と中国革命の歩みの延長線上にあり、それ故にその国際関係への理解や対応準備に限界があった」という仮説を提示する。本研究の問題意識は、朝鮮戦争は現代中国の安全保障政策の原点であり、その後長きにわたって影響を及ぼし続けそれを規定したのではないかということである。

続く「第一章」から「第一〇章」では、中国の朝鮮戦争への介入・参戦の決定、5 次にわたる各戦役の過程、そして停戦交渉の推移がほぼ時系列的に分析される。

「第一章 中国建国初期の安全保障と朝鮮戦争への介入」

中華人民共和国建国前後における毛沢東にとって、台湾の「解放」、新国家の建設とともに重くのしかかっていたものは、「米帝国主義」の脅威であった。中国指導部は、朝鮮戦争勃発直後に米国が台湾海峡へ海軍第七艦隊を派遣したことを直接的な契機として台湾「解放」が妨げられたと認識した。それは受け身の脅威ではなく、「米帝国主義」が自らの意図と行動に立ちはだかったことによりそれを排除しなければならないという、いわば能動的な脅威であった。毛沢東にとって台湾「解放」は、「国家の安寧」に関わる安全保障問題であった。その「国家の安寧」が阻害されたのであるから、毛沢東はこれに積極的に取り組まなければならない。毛沢東の安全保障観にとって最優先事項は、当面、朝鮮戦争になったのであった。

「第二章 中国の朝鮮戦争参戦問題」

毛沢東の強い意志によって中国の朝鮮戦争参戦は決定された。しかしなお実際の出動・参戦までに、中国指導部の躊躇や参戦の再検討があった。そこにはソ連の動向も関与していた。だが参戦の決定は毛沢東の強い意志の下、準備不足による躊躇を乗り越えるに十分な中国の強い脅威感に突き動かされて能動的に行われた。中国の脅威感は「米帝国主義」に抵抗するという点で総体的かつ確固なものとなって中国を主導的な参戦へ導いたのである。その意味では、中国の参戦決定は確信的、意図的、かつ前向きのものであった。

「第三章 第一次、第二次戦役—三八度線と停戦協議」

中国人民志願軍は第一、二次戦役によって戦線を大きく前進させ快進撃を続けた結果、戦争前の北朝鮮領域をほぼ回復させた。これにより中国は必然的に、北緯 38 度線が国際的に意義を有するものであるということを再認識する。戦争を続けることは朝鮮半島に新たな状況を生み出し、国際的な対応が迫られることになるからである。朝鮮戦争の様相は、軍事的にも政治的にも北緯 38 度線をめぐる攻防となった。ここから中国の「米帝国主義」にどう立ち向かうのかという苦悩が始まった。志願軍の快進撃は国連軍に阻まれ、軍事的に有利な立場で停戦交渉を始めるという毛沢東の企図は順調に達成されなかった以上、交渉で政治的に有利な立場を獲得する目論見は現実のものとならない。したがって停戦交渉は複雑に紆余曲折を重ねることがすでに予見された。

「第四章 第三～五次戦役—停戦交渉への軍事過程」

志願軍は北緯 38 度線を南へ越えて進撃したが、兵力も補給も追い詰められた。そこで毛沢東は、国連政治委員会が停戦をめぐる決議を出したことをきっかけとして、これに応酬することとした。毛沢東は、北緯 38 度線を越えた第三次戦役終了時点でなお中国は有利な立場にいると主張してはいたが、志願軍の苦境から戦争を強力に継続する訳にはいかず、交渉を始める糸口を見つける必要があった。だが国連軍側の反攻が始まり、志願軍にとっては受け身の態勢で第四次戦役を迎えることとなった。そうした中、中国は国連総会によって「侵略者」と規定された。中国としてこの状況の中では停戦交渉を受け入れることはできず、志願軍による反攻という態勢に持ち込まなければならなかった。そこで防御か

ら攻勢に転じて戦争の主導権を奪回することを企図した第五次戦役が発動され、志願軍は前進して再度北緯 38 度線に達し、同軍の一部はこれを越えた。中国は停戦交渉の開始を望んでいたとみられるが、こうしてこの企図は概ね達成された。中国は軍事的に苦境に陥りつつも、戦争の政治的解決への途の端緒にたどり着くことにいちおう成功したのであった。

「第五章 停戦交渉の開始に関する一考察」

「米帝国主義」を朝鮮半島から駆逐することから、いかにそれに対して強く抵抗し中国の抵抗力を国際社会に見せつけるかということに中国の戦略目標は移りつつあった。このため、毛沢東による「戦いながら交渉する」という方針が確立された。だが停戦交渉開始時に、必ずしも中国は具体的で明確な交渉の目標や展望を準備できていなかった。それには中朝間で戦略目標の統一が図られていなかったこと、ソ連からの軍事支援供与が思惑通りに運ばなかったことが関係している。中国は停戦交渉に応じつつ、何とか自力で反攻しなければならなくなり、ここから「戦いながら交渉する」という方針に不確実性、流動性が生まれた。軍事的に何を解決したり達成したりすれば、政治的に何を獲得できるかという軍事から政治へ至る道筋が明確に準備されていなかった。たとえば後に最大の障害となる捕虜送還問題について、すでにこの時点で毛沢東は国連軍側と対立が生じるであろうことを予想していたが、彼はまだそれが中国の朝鮮戦争参戦の政治的大目的と関わる問題であるとまで思いが至っていなかった。それだからこそ毛沢東は、反攻を準備して「戦いながら交渉する」という時間稼ぎをしようとしていたのである。

「第六章 外国軍隊撤退問題と軍事分界線問題」

停戦交渉開始に当たって毛沢東は、まず外国軍隊の撤退問題を強く持ち出したことにより、中国は朝鮮半島における戦闘終結を望んでいるという平和愛好志向を対外的に誇示できたとして、それ以上これに固執しなかった。中国は実質的な交渉に入ることを強く望んでいた。交渉では、軍事分界線に関し中朝側は譲歩して現接触線案に同意することとなった。中朝側の反撃が一定程度の成果を収めたことによって、むしろ現接触線案への譲歩はされやすくなっていた。中国は攻勢の中で交渉を行うということに固執しており、「戦いながら交渉する」という毛沢東の大方針はそのような意味であった。だがこうした過程において、中

朝間で常に意思の統一が図られ、北朝鮮側が中国の交渉方針に満足していたかどうかには疑問の余地がある。中朝それぞれにとって、何のために戦っているのか、戦って何を得られるのかが完全に一致していた訳ではなかった。今日に至るまでの朝鮮半島の分断状況は、この時期の中朝間の齟齬に一つの出発点があると考えられる。

「第七章 軍事分界線交渉と軍事過程」

1951年の国連軍による夏季攻勢と秋季攻勢によって、中朝側は大きな軍事的損耗を被り、停戦に向けて譲歩せざるを得ない状況に陥った。だが中国は交渉の劣勢を挽回するために、戦争の長期化を覚悟し十分に準備を重ねる必要があった。中国が第六次戦役を見送ったことは、ソ連へのさらなる軍事支援の要求を含めた軍事態勢の立て直しのためであった。「戦い」の準備もしなければならないが、他方「交渉」で譲歩ばかりするわけにはいかない。譲歩するにしても、さまざまな口実をつけて抵抗し、政治的な強硬姿勢を常に誇示しなければならない。

「戦いながら交渉する」方針によって、中国は軍事と政治の整合性を保つのに苦慮していた。このことは、戦争をどう終結させるかという展望や目標をますます曖昧にさせた。軍事情勢の推移を戦争の政治的結末へ至らせるには、自らに有利となる大きな流れを生み出さなければならないが、戦場は中朝側劣勢であり、膠着状態に陥っていた。だが中国は不利な軍事情勢にありながら、交渉では巧みに強硬姿勢を示して国連軍側を当惑させた。それによって短期的には中朝側が一方的に譲歩することで停戦へ追い込まれるような事態には陥らずに済んだ。それだからこそ戦争の終結はますます先送りされる結果を招いたのである。

「第八章 問題の収斂と交渉の政治問題化」

続く難題は、「停戦の実現と休戦の具体的措置」の問題であった。中国はこの問題を利用して停戦交渉の政治問題化、すなわちこの交渉が純軍事的なものではなくあくまで政治の延長であることを国際社会に示した。国際世論への訴えは、二つの側面から行われた。中国は中立国代表による査察を持ち出すことで、朝鮮戦争を政治的に国際問題化させ、朝鮮半島沿岸島嶼からの国連軍撤退を要求することで、北朝鮮の政治的存在の保障を国際社会に認知させようとした。中国のこの志向は、続く捕虜送還問題にさらに政治的意義を与えることになった。また各国政府への建議事項に関する問題に巧みに台湾問題を織り込ませたとい

う点で、やはり中国にとっての朝鮮戦争の政治問題化が図られた。だが中国は、自らの強い要求を巧みに粉飾することによって、交渉そのものを決裂させるような行動には出なかった。中国は、朝鮮戦争を糸口に政治問題を持ち出して自らの存在を国際社会に大きく主張したいがために耐えたのである。また、軍事情勢がなお中朝側にとって不利であったことも、そのままの態勢で交渉を決裂させたくなかった要因であった。政治と軍事の融合に苦慮する中国の姿がますます明らかになっていった。

「第九章 捕虜送還問題と軍事過程」

中朝側、国連軍側双方にとって決定的に対立した争点は、捕虜送還問題すなわち中朝側が主張する一括送還と国連軍側が主張する任意送還の対立であった。志願軍捕虜の中に、中国への送還を望まない者が多数現れたことは、中国の目指す朝鮮戦争による政治的成果を大きく揺るがすものであった。自らの存在を誇示し、その正当性を国際社会に喧伝するという参戦目的からして、中国は大きく面子を失うことになるからである。それは中国革命や中国という新生国家の政治的意義に関わる問題でもあった。名目上とはいえ志願による義勇軍の形をとって参戦した兵士の多くが、捕虜となるや祖国への帰還を望まないということは、台湾統一を国是とし、そのためにも参戦に踏み切った中国にとって大きな衝撃であった。とりわけ、そうした捕虜は、朝鮮人民軍捕虜よりも志願軍捕虜の方がはるかに多かったことは、中国にとってはなおさら受け入れがたかった。したがって、それを理由に交渉を決裂させるかどうかに関し、中朝間にさらに齟齬をきたすこととなった。しかしながらこうした衝撃を跳ね返すだけの軍事的な能力は、中国にはすでに残っていなかった。ソ連からの軍事支援も中国の思惑通りになされなかった。中国の望む政治的な戦果は、もはや中国の軍事力で獲得できるようなものではなくなっていることを中国は痛感した。

「第一〇章 朝鮮戦争後期における中国人民志願軍一対着上陸作戦の懸念と準備行動」

停戦交渉において、政治的意義の大きい捕虜送還問題を有利に推し進めるだけの軍事力を有していなかった中朝側にとって、ここで国連軍が戦線後方に着上陸を敢行すれば、これまでの蓄積と忍耐が完全に突き崩されることになる。ソ連からの軍事援助は要求通りに進まず、またソ連の軍事顧問団を通じた技術や

兵器装備は現場の部隊に必ずしも歓迎されていなかった。中朝間の不協和音に加えて、中ソ間の不協和音に中国は悩まされ続けていた。また、長期化する戦線において、現地の部隊の間には任務の重さや複雑さ、難しさに差異があり、志願軍内に不安感や不平不満が生じていた。そうしたことから、毛沢東は「何年か」戦うとして戦争の継続を強く国内的に呼びかけたが、弱気の姿勢も見せるようになった。中国にとって戦争継続は事実上不可能な状況に陥っていたのである。

以上の検証を通じて次のような結論が得られた。

中共には参戦、戦闘、停戦交渉いずれにおいても、独特の発想やその転換が見られた。中共は朝鮮戦争に積極的に介入することによって「反帝国主義」の主張を改めて国際社会に標榜し、中国革命を成就させた自らの存在を誇示した。また、そこから台湾「解放」による国家統一への道をも模索した。さらに中共は、その後の戦況の悪化を停戦交渉と結び付け、軍事的苦境の中でむしろ政治的主張を強めることにより交渉の立場が不利になることを回避しようとした。だが戦争の持つ複雑性、不確実性により支援相手の北朝鮮との間にさまざまな軋轢が生じ、それは戦争遂行を困難にさせた一つの要因となった。ソ連からの軍事援助も期待したようには得られなかった。また祖国送還を望まない捕虜の処遇問題をめぐって、中共は国際社会に対する自らの政治的主張が揺らぎかねない事態に陥った。

こうしてみると、中共が朝鮮戦争に介入した際には革命事業から国家事業への転換にまだ不慣れであったこと、また紆余曲折する停戦交渉の経緯から中共は国際社会との関係に対する理解が不十分であったことが推察される。言い換えれば、中共は朝鮮戦争を通じて国際社会というものを体感し、その現実直面してこれを学んだのである。その意味で、国家を担うようになった中共にとって、朝鮮戦争は国際社会に対する大きな挑戦であったと同時に、さまざまな経験を積み教訓を得る機会という意義を有するものであった。それらとともに中共は、朝鮮戦争に介入したことで、自らの主張と存在感を世界に印象付けることに成功したという自信を深めた。こうしたことは、その後の中共による国家建設に様々な影響を与えたと考えられる。革命事業の主体であった中共が改めて国家安全保障を認識し、その確立を目指す重要な契機となったのが、中国の朝鮮戦争であった。